



©2024 "A Girl Named Ann" Film Partners

A Girl Named Ann

あんのこと

2024, 113 min, English subtitles

Director: **IRIE Yu**

Cast: KAWAI Yumi, SATO Jiro, INAGAKI Goro

【ネタバレ注意】

入江悠監督の作品には、常に同時代性のテーマが強く打ち出される。彼の目線は、社会の中央から遠く離れた場所で、その存在を知られることなく生きる者たちに愛情深く注がれ、「私は確かにここで生きているのだ」という登場人物の主張が映画の中で鮮やかに刻印される。それは個のしたたかさであり、弱者の意地や誇りであり、社会の軋轢により生じるかなしみや息苦しさだったりする。

デビュー作『サイタマノラッパーSR』（2009）は東京から105km、電車や車で2時間ほどの近い距離にありながら、文化的には天と地ほどの隔りがある埼玉のとある郊外で世界的なラッパーになることを夢見る若者たちの群像劇だった。自主制作からスタートした彼のキャリアはメジャーとインディーズを行き来しながら、精力的に作品を増やし続け、その独自の立ち位置は若い世代のモデルケースになるとして、2024年の第37回東京国際映画祭 Nippon Cinema Now 部門にて「監督特集：入江悠」としてフォーカスされた。

その東京国際映画祭の市山尚三プログラミング・ディレクターが入江悠特集を組むことを決意した作品と言っているのが『あんのこと』である。

この作品は、入江が2020年6月1日の朝日新聞に掲載された新聞記事から着想を得た作品である。

記事は同年5月4日未明、東京の繁華街の路上にて亡くなっていた25歳の女性ハナ（仮名）の短い人生を追ったものだった。幼い頃から母親に暴力を振るわれ、小学3年生で不登校になり、そこから学校から遠ざかった少女。11、12歳の頃には母親から売春を強いられ、14歳のときにホテルで暴力団関係者から勧められて覚醒剤を使い、常習になってしまう。だが、薬物使用の逮捕をきっかけに、取り調べをした刑事の男性から薬物経験者や家族らが語る集まりの存在を紹介された。4月からの夜間中学への入学も決まっていたが、2020年3月13日に新型コロナウイルス対策の特別措置法に基づく措置で外出の自粛が要請され、それまでの密な支援が彼女に届かなくなる。その末の死を綴ったものだ。加えて、ハナを熱心に支援していた刑事に、ハナの死後、相談に来た女性の下着姿を撮影したことで、特別公務員暴行陵虐罪で逮捕、起訴された別件の記事も参考になっている。

映画ではハナにインスパイアされた女性を杏として、河合優美が演じている。事実をそのままトレースするのではなく、ハナから杏へとその人生を託し、彼女が夢見ていた学びのやり直し、その延長線上にあった介護士への就職を映画の中ではわずかな期間ながら体験させ、コロナ禍がもたらせた様々な断絶が、それらの夢が急激に萎ませてしまった現実を浮かび上がらせる。モデルとなった新聞記者には実際に入江監督と河合は会って話を聞いており、元刑事に関するバックグラウンドには裁判を傍聴した記事を書いたライターにも聞き込みをした。誠実なアプローチをしながらも、個の物語を、見ている観客が自分のこととしてとらえるような様々な工夫がなされている。何より重要なのは、杏の物語だけ

Dates & Venues	Dates may vary
7 – 16 February Institute of Contemporary Arts (ICA), London	14 – 18 February Chapter, Cardiff
7 February – 29 March Firstsite, Colchester	14 February – 5 March The Ultimate Picture Palace, Oxford
7 February – 29 March Phoenix, Leicester	16 February – 31 March Eden Court, Inverness
7 February – 16 March QUAD, Derby	16 February – 9 March Hyde Park Picture House, Leeds
7 February – 31 March The Phoenix Cinema, Kirkwall (Orkney)	17 February – 6 March HOME, Manchester
7 February – 6 March Warwick Arts Centre, Coventry	21 February – 4 March Riverside Studios, London
8 February – 29 March Brewery Arts Cinema, Kendal	22 February – 23 March Dundee Contemporary Arts, Dundee
8 February – 31 March Chichester Cinema, Chichester	1 – 31 March Aberystwyth Arts Centre, Aberystwyth
8 February – 30 March Frankopan Hall, Jesus College	1 – 29 March Exeter Phoenix, Exeter College
8 February – 30 March Queen's Film Theatre, Belfast	3 – 31 March Cinema City Picturehouse, Norwich
8 February – 5 March Storyhouse, Chester	3 – 24 March Picturehouse @ FACT, Liverpool
9 February – 16 March Cube Cinema	6 – 31 March Cameo Picturehouse, Edinburgh
9 – 28 February Showroom Cinema, Sheffield	6 – 27 March Plymouth Arts Cinema, Plymouth
9 February – 1 March The Dukes, Lancaster	10 – 31 March City Screen Picturehouse, York
10 February – 31 March Tyneside Cinema, Newcastle upon Tyne	14 – 20 March Broadway, Nottingham
13 February – 8 March Depot, Lewes	14 – 20 March Midlands Arts Centre, Birmingham
13 February – 23 March King Street Cinema, Ipswich	

Major Supporter



Sponsors in Kind



Cultural Partners



でなく、杏のような身内に守ってくれる存在がない若者と関わることとなる大人たちの物語として構成されていることだ。

子供の成育には、親や親せきという第一の関わり合い、そして学校という第二の密接な場以外に、定点観測として適切な指導ができる第三の大人の存在が必要と言われる。『あんのこと』には、杏にとって初めて親身になってくれる多田羅という刑事が現れることで、人生で初めて第三の大人たちと深く関わることとなる。筆頭は、佐藤二郎演じる多田羅であり、杏は多田羅が主催する薬物更生者の自助グループ「サルベージ赤羽」で同じ境遇にいる多くの大人たちと知り合う。多田羅とサルベージ赤羽を取材中の週刊誌記者の桐野（稲垣吾郎）は杏にとっては初めて損得なしに安心して甘える存在となり、この3人がよく通うことになる町中華の店主もまた、杏にとって、気兼ねなく訪ねることのできる居場所となる。何より、桐野の紹介によって杏が就労する、老人介護施設の所長の過去を不問とし、現在の杏を徹底的に守る姿勢が印象深い。事情を知らず、杏の給与明細を母親が暮らす団地に送ってしまったことで、母親、春海の怒鳴りこみの際にも毅然とした対応を示す。他にも、介護施設で杏に心を開く入居者の老人、シェルターとなるアパートへと案内する職員など、濃淡はあれど、杏の立ち直りには多くの大人たちが関わる姿が描かれる。一人の人生をやり直すにはこれほどまでに多くの人材が必要となり、その中に一人に自分になれるかと、観客に想起させる構成となっている。

それほどまでの多くの大人たちの関わり合いをももってしても、河合青葉演じる母親、春海という人物が杏へ及ぼす負の影響力は断ち切れない。娘に依存し、困窮したときは自分が加護される側と言わんばかりに杏をママと呼ぶ異様さは忘れがたい。今作においては、娘が連れてくる子供を、娘との約束をあっさり反故としてしまう信頼関係のなさが、杏の絶望へと結びつくような描かれ方となっている。入江監督は春海のバックグラウンドには、杏の祖母から受けた暴力の連鎖があるの事を数々のインタビューで示唆しているが、映画では深くは言及しない。このパートで描かれなかった痛みは、別の機会でも、入江監督の作品で見たい。

そして今作の支柱となっているのは、もはやその気持ちを確かめようもない路上で命を絶ったハナの在りえたかもしれない別の人生を杏として演じた河合優美の市井の人としての佇まいにある。モデルとなったハナと交流していた記者から得た「仲のいい大人と一緒にだとその人の陰に隠れたがるような、ちょっと幼い女の子のような印象」との情報を基に、荒んだ生育から抜け出すに至る過程で、強張った表情が徐々に小さな笑みが増えることで、柔らかくほころんでいく過程を見せる。2024年の河合は山中瑤子監督の『ナムビアの砂漠』で、何かの枠にはめようとする男性たちの視線に抗うように奔放に生きようとする主人公を演じ、第77回カンヌ国際映画祭の監督週間でも国際映画批評家連盟賞受賞の功労者となり、また第37回東京国際映画祭コンペティション部門で東京グランプリ、最優秀男優賞、最優秀監督賞の三冠に輝いた吉田大八監督の『敵』でも鮮やかな存在を見せつけ、若くして日本映画界を牽引する。

入江悠と河合優美がタッグを組んでの『あんのこと』はコロナ禍で声を上げられなかった者たちに替わって、社会にその存在を忘れさせないための記憶として、いつまでも残り続けるのだ。

金原由佳
映画ジャーナリスト

Copyright belongs to the Japan Foundation. You may not copy, reproduce, distribute, modify, or distribute any part in any form without permission. Any errata are the responsibility of the Japan Foundation.